不思議なやり方

「ほらほら手が止まってる！そんなんじゃいつまで経っても先に進めないわよ！」

反発心を煽り、好き放題言わせてたまるかという怒りを発端とした成長を促すような叱責の声が宿屋に響く。昨日と打って変わった鮮やかな色に包まれた光景には、仏蘭のその腹式から放たれる音はどうやっても馴染んでいなかった。

「本当にこんなことで、雨ノさんは自信を持つことができるのでしょうか。」

その様子をカウンターの椅子に腰掛けながら見守っていた番才が、同じくカウンターの内側から微笑ましく見つめている女将に尋ねる。

「ひっひっひっ。さあ、どうだろうねえ。だ何もやらないと可能性は生まれない。やっているのだから何か結果が生じるはずさ。」

お茶をする音が言い終わりを告げる。背中で聞いていた番才は、机の上に置き切れず所

狭しとソファや床を埋め尽くしている大量の〝布〟に囲まれながら作業をしている雫を見つめた。

「ふぇっふぇっふぇっ。相変わらず回りくどい言い方だねえ八雲や。あんたを慕う物は理解しようとしてくれるが、そうじゃない物にしたらただの嫌な女さ。いつか後ろから刺されちまいそうだ。」

足が床につかないカウンターの椅子に座っている自分の頭の上から聞こえる、鼓膜まで這うように伝わる振動に思わず背筋が伸びる。

「余計なお世話さね。安心しな。心配せんでもあやつにはすでに刺されそうになってるよ。」

いつもと変わらない女将の声に、まるで冷水とお湯を同時に掛けられているような気持ちになる。「ふぇっふぇっふぇっ」と黒い外套の奥から聞こえる夜蜘蛛の枯れた粘着質な笑い声が、再び番才に冷や水を浴びせ掛けた。

「雫に服を作らせるわ！」とあの後女将を

指差した仏蘭は、そのまま坂道を転がる岩にさらにジェットエンジンを搭載させたような早さで、一晩でこのような状況を作り上げた。

「あの蜘蛛ばばあの部屋にたくさん布があったわ。」と、当然のように自分の頭によじ登りながら語る仏蘭に「何をされるんですか？」と番才は少し慌てて尋ねる。

「まあまあ、わたしに任せときなさいって。あんたは準備だけ手伝ってくれたらそれでいいから。後は部屋でゴロゴロするなり自分の今後を考えるなり好きにしなさい。」

「いえ・・あの・・・」

〝蜘蛛ばばあ〟や〝布〟という単語と仏蘭を掛け合わせて一番最初に思い浮かんだ光景に思わず身が震えた。暗闇の中で光っていたあの空洞と記憶の中で目が合ってしまい、まだ何もしていないのに冷や汗が背中を伝う。

「何よ？まさかこの後に及んで手伝えないとか言うんじゃないでしょうね？」

「いえ、別にそんなわけじゃなくて・・・た

だ・・・」

「〝ただ〟何よ？」

「その・・・縫霊の間に・・・と言うよりもそこの住人にあまり良い思い出がなくて・・・」

目線だけを動かして、番才は不思議そうにこちらを見つめる宿泊者たちを見つめ返す。自分を除けば女性二人と少年一人と高齢者に人形。どう考えても自分がやらなければいけない状況だが、決定的な何かでもない限り四肢の神経の秤が〝積極〟へと傾くことはない気がしていた。

雷鼠がソファの背もたれに体重を預ける。その場に番才の心の葛藤を見届けるような静寂が漂い始めかけた時、「ねえ。」と優しい仏蘭の声がその静寂を追い払った。肩に感じる重さと互いの髪の毛が触れ合う感触。首を捻ると覗き込むようにこちらを見つめてくる仏蘭の大きな目と視線がぶつかった。

「雫を、た・す・け・た・いんでしょ？」

不敵な笑みを浮かべながら印籠のように仏蘭

にそう言われ、番才は逃げ道をなくした。

記憶の中で鮮明に鈍い光を放ち続ける忘れたくても忘れることのできないあの瞬間を何度も思い出しながら、もう二度と行くこともないだろうと思っていた縫霊の間へと赴き、番才たちはろうそくの光を頼りにしても心許ない暗闇が廊下を埋め尽くす時間帯までかけて布を運び出した。

何度その姿を見ても慣れることのない夜蜘蛛が醸し出す恐怖に耐えていた精神は疲弊し切り、部屋に戻って泥のように眠っていた番才を起こしに来た女将の「なんだか面白いことになっているよ。」という言葉を苦笑いで受け止めた番才は、こうしてもう何度目かも覚えていない仏蘭の挑発するような音を拾い続けていた。

「しかしなんだね、こんなに騒がしい音や光景はいつ以来だろうかねえ。」

「さてね。どれくらいかはもう忘れちまった」

「ふぇっふぇっふぇっ。忘れちまうほど昔だってことかい。それかあんたがぼけちまってるかだ。」

「ふん。人のこと言えた立場じゃないだろう。そんな暑苦しいものこさえて、魔女か下手すりゃ山姥（やまんば）だよ。中身が追いついちゃいないってのにさ。」

「ふぇっふぇっふぇっ。」

「ひっひっひっ。」

後ろで交わされる会話の圧力と密度の高さに、番才は飲み込めず溜まっていた唾を喉を鳴らして胃に流し込む。振り返った先の二人の表情を想像して、乾いた口内を舌で潤した。

「ほらほら、あんた達も見てないで手と頭を同時に動かしなさい！人の見たって余計な情報が増えるだけで困るのは自分よ。合わせなくていいから自分から湧き出るものに集中しなさいな。」

仏蘭の叱責がまた空気をかき混ぜていく。紅蘭や雷鼠も雫同様、並べられた布を手で触り

感触を確かめては、手元の紙に何かを書き込んでいく。

「まずは自分で考えるの。人に聞くのはその後よ。二人も手伝ってくれてるんだから、遠慮はしなくていいけどちゃんと自分の中で整理してから質問をしなさい。」

そう言いながら自身も何かを物色しているのか、仏蘭はすでに数枚の布を目の前に広げ腕を組んでそれらを見下ろしていた。

「まさか〝あの子たち〟までいるとはね。わたしは姿を見るのさえ久方ぶりだよ。」

夜蜘蛛が感慨深気に言う。その視線の先に何があるのかは、確認するまでもなく推測することができる。

「わたしにとっちゃあんたの行動だって十分驚きだよ。どういう風の吹き回しだい？」

「ふぇっふぇっふぇっ。なーに、わたしは番才や仏蘭の頼みに答えただけさね。のう、番才や。」

腰から背中に沿って伝う夜蜘蛛の手が右肩に

置かれ、そのまま左肩も掴まれたかと思うと、視界の端に夜蜘蛛が纏う黒衣が見え隠れし始めた。

「誰かのためになんてお願いされたことすら、もう思い出せないほどさ。あの時も二人とも良い目をしててねえ。キレイで・・闇の中にちゃーんと光を宿している。ぜひ今度、ゆっくりと・・・もう一度見せて欲しいくらいさ・・・。」

見えていた黒衣が徐々に視界を侵食していき、番才は視覚と聴覚以外のすべての機能を奪われていく。すぐ耳元で聞こえてくる恐ろしい声を無理やり頭に文字として刻み込まれるような感覚を覚え始めた時、「その辺にしときな。だからあんたを宿泊者と関わらせたくないのさ。」と女将の声と共に風が吹き、その瞬間だけ恐怖もどこかへ消え去っていった。

「ふぇっふぇっふぇっ。怖い怖い。随分とお気に入りみたいだねえ。」

「そんなんじゃないよ。いいから離れな。い

つも言ってるがね、ここの宿泊者はあんたの
おもちゃじゃないんだよ。」

「ふぇっふぇっふぇっ。自分のことは棚に上
げてあんたがそれを言うかい？」

先ほどまでとは別の緊張感が急激に勢力を上
げて渦巻き始めた。

「ちょっとおばばー！これのもうちょい淡
い色味のやつってないのー？」

遠慮や推量を欠片も含んでいないその質問に
「おや？おかしいねえ、あるはずだよ。よー
く探したのかい？」と夜蜘蛛は答え、渦は形
成されることなく霧散していった。今度は仏
蘭の声に救われた番才は、横をすり抜け机の
方に向かう黒い塊、その黒衣の裾と床の間で
時折見え隠れする鋭利な爪と枯れた手の甲を
見送る。顔に貼り付く油を両手で拭い、よう
やく女将の方を振り返った。

「ひっひっひっ。随分とまいってるみたい
だねえ。」

「ええ、止めていただけなかったらと思うと

九死に一生を得たような気分です。」

目を合わせ一度深く頷いた女将は、視線を騒がしく作業をしている仏蘭たちの方へ向けた。

「夜蜘蛛も言っていたけどね、本当に不思議な光景さ。仏蘭のやろうとしていることは、雫を傷つける結果を招くことだってある。だけどね、こうやってたくさんの物の気持ちを動かす力が働いていることだけは疑っちゃいけないよ。そしてそれには・・・当然あんたの存在が大きく関わってる。」

女将はそれだけ言い残すと「さて、人数分のお茶でも用意するかね。」とお盆片手にその場を離れていった。

番才は身体の中の空気を入れ替えるように大きく息を吸い、そして吐き出した。太腿の上に置いた両の掌を何気なく見つめ、汗を染み込ませるように腿の布に押しつける。目線を上げた視界の中心に映る雫たち。見覚えのない黒い人型の影と着物を着崩した女性。この騒々しさがもう少し続いてはくれないかと、

番才はカウンターに肘をつきゆっくりと目を閉じた。

〜続く〜